

ラファイエット夫人の手紙 — 友人たちと文学 —

森本信子¹

はじめに

フランス心理分析小説の祖と言われる『クレヴの奥方』の著者として、ラファイエット夫人は後世のフランス及び世界の文学に大きな影響を与えてきた。この作品の発表直後に出版されたヴァランクールValancourの批評に始まって、彼女の作品や生涯について多くの研究がなされてきた。手紙に関しては、2014年にプレイヤー版の全集に収録されたことで、全体像を時系列で読むことができるようになった。この全集には、12人の相手宛の275通の手紙、時期としては結婚前のラファイエット夫人が18歳だった1652年から、ラファイエット夫人が59歳で亡くなる前年の1692年まで、約40年にわたるものが集められている。そのうちの大半がメナージュ宛で180通にもなるが、1676年から1690年までメナージュ宛の手紙は残されていない。生涯にわたる親友であったセヴィニエ夫人宛の手紙は14通で、これらは1672年から1673年と、1689年から1692年に集中している。生涯深い友情で結ばれたこの二人との文通が途切れる1676年から1689年間の手紙は、宮廷への伺候が再開されたことによる事務的な内容が中心だが、ラ・ロシュフコーとの関係が親密になりサロンでの存在感が増す中で『クレヴの奥方』の執筆が静かに進められていた。1662年刊行の『モンパンシェ侯爵夫人』と1669年刊行の『ザイド』に関しては校訂段階にあることを示す文章がある一方で、『クレヴの奥方』に関しては出版後の短い感想が残されているだけである。他人の作品については創作段階での多くの感想を書き留めているが、執筆中の自身の作品については沈黙を守る姿勢が明らかである。結果としてこの作品は匿名で出版された。

本稿では、私信と考えられる手紙を検討することで、ラファイエット夫人の文学的素養の形成と円熟、17世紀の文学において果たした役割、匿名性へのこだわりの真意を探っていく。手紙を通してラファイエット夫人の人物像を明らかにしながら、作品解釈の新たな手がかりを得ることも視野に入れる。

1 メナージュとの出会い

1634年3月生まれとされるマリ・マドレーヌ・ピオッシュ・ドゥ・ラ・ヴェルニユは、下級貴族であった父と、宮廷医官の娘で公爵夫人の侍女だった母によって3人姉妹の長女としてパリのヴォジラール街の屋敷で育てられた。10代の後半から積極的に貴族のサロンに出入りし、社交術を学びながら、持ち前の冷静さで周囲を観察する目を磨いていった²。こういった交遊の中で、『クレリー』の著者スキュデリー嬢や、神父で詩人のメナージュと出会う。15才の頃、父が亡くなり母がルノー・セヴィニエと結婚したことで、生涯の友となるセヴィニエ夫人と知り合うようになる。ある親友が結婚によって離れていった18歳の頃から、メナージュとの関係が親密になっていく。メナージュとの頻繁な手紙のやり取りが始まるのは1653年9月、マリ・マドレーヌが19歳の時である。

¹ 薬学部第4英語研究室

² Émile Magne, *Madame de Lafayette en ménage*, Éditions Émile-Paul Frères, Paris, 1926, pp.41-45.

21 歳で 18 歳年上のラファイエット伯と結婚した後もメナージュとの師弟関係は続いていく。

2 メナージュ宛の手紙—文学の開眼

ラファイエット夫人はセヴィニエ夫人と共にメナージュからイタリア語やラテン語を学んでおり、生徒と教師の関係にあった。10 代および 20 代のメナージュ宛の手紙は一種のラブレターだとする研究者もいる³。ここでは、恋愛感情が事実としてあったかどうかよりも、疑似恋愛としての文通が、心理の繊細な動きに分け入る言語表現を磨く絶好の機会となっていることに注目したい。たとえば、「セヴィニエ夫人と滅多にお会いにならないから、私が妊娠していることを知らなかったなんてことはないはずですよ。あなたがご存じなかった理由は、夫人がそばにいらっしゃるとき私の話をしないからだだと思います。私のことをすっかりお忘れになるのも許してあげましょう。だって、夫人は他の人のことを忘れさせるのがお上手ですから」⁴という文章には、メナージュの無関心への当てこすりだけでなく、セヴィニエ夫人の魅力や、セヴィニエ夫人への友情までもが込められている。また、「私にさよならをおっしゃるときあんなに平気な様子で去っていくのですから、もし私がお手紙を差し上げなければ、あなたは、私の不在の慰みに私に手紙を書こうなんてずっと思わないことでしょう。でも、そんなにあっさり私をお忘れになる楽しみに浸らせてあげるつもりはございませんわ」⁵という 56 年の手紙にも、メナージュへの非難とメナージュへの友情が同居しており、簡潔ながら機知に富んだ文章で、受け取った相手に喜んで返事を書かせる力を持っている。2 日後にはメナージュ宛に「まあ！あなたってなんていい方なのでしょう。私のお手紙を受け取って、いやな顔をせずにお返事を下さるなんて」⁶と返信していることから、ラファイエット夫人の思惑通り、この手紙を受け取ったメナージュがすぐに返事を書いたことが分かる。ラファイエット夫人はメナージュとの文通を通して、心理の動きを観察して言語を駆使する術を磨き、相手の出方を楽しんでいるのである。

また、この頃のラファイエット夫人は、スキュデリー嬢の『クレリー』に熱中しており、入手を心待ちにしていることがいくつかの手紙に書かれている。たとえば次のような『クレリー』に関する感想には、作家としての特色の兆しははっきりと現れ始めている。「『クレリー』についてお伝えしたことをお認め下さったのは嬉しいですが、あなたのお気持ちが私と同じでないのは残念です。ローマ人の才気についてのあなたのご意見には賛同しますが、ローマ人の才気とは、尋常ならぬ度量と祖国への無限の愛から来ていることもお心に止めて下さい。ですから、優しい愛情の問題を『クレリー』と同じように描いたと言うことはできないのです。それに、タルカン（訳者注：紀元前 6 世紀のローマ王タルクィウス）の時代には、雄弁と礼節は、その後のローマのように知られていなかったことも。ローマは始まったばかりで、まだ洗練されていませんでした」⁷。この部分はまず、主張を伝える議論の進め方が的確である。最初にメナージュの意見への基本的な同意を表明し

³ *Œuvres Complètes*, éd. Camille Esmein-Sarrazin, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 2014, p.1439. 日本語訳での引用は拙訳による。

⁴ *Ibid.*, p.858.

⁵ *Ibid.*, p.868.

⁶ *Loc. cit.*

⁷ *Ibid.*, p.862.

た上で、自分の意見に異なる点があることを切り出し、最後に自分の意見の正当性を述べる、という、絶妙な説得となっている。面と向かって相手を納得させようとする時の、生き生きとした会話の調子そのまま書き言葉に移し替えられているのである。次にこの文章には、ラファイエット夫人が文学において何を重視していたかが明確に現れている。ラファイエット夫人は『クレリー』が、「尋常でない度量と祖国への無限の愛」に駆られる英雄像から離れ、「洗練された」言葉によって「雄弁」に真実らしい恋愛心理を描いていることを高く評価する。恋愛心理を扱う言葉は、洗練された文化が要求する「礼節」に適った品格ある簡潔さを備えていなくてはならない。ラファイエット夫人が『クレリー』を愛読する理由は、等身大の登場人物の心理分析の中に古典主義の萌芽を見出したからであり、やがて彼女はそれを発展させることになる。

このように、メナージュへの手紙を書くことを通して、ラファイエット夫人は相手の心理を上手につかんで書くことを学ぶと同時に、自らの文学の好みを明確に言語化していった。次第にメナージュに対する批評者あるいは助言者とも言える存在へと成長していく。1657年の手紙では、メナージュの「ロワズルール」という詩に関する感想を述べる中で、「離れる」*éloigner* という単語の使い方について疑問を呈している。「『すぐにあのつれない人はこの美しい場所を離れていった(*éloignait*)』。—私は『この場所から離れていった(*s'éloignait de*)』とすべきではと思います。というのも、ユリラはキプロスを離れることはできますが、彼からキプロスを離すことはできないからです。普通の話し方では(神の言葉で同じかどうかは分かりませんが)人から離れていくことと、自分から人を離すことには大きな違いがあります。この点について、どうかお返事下さい。美しいのですが気に入らない箇所がまだ二カ所ございます」⁸と書き、フランス語の正確さの観点から異議を唱えている。教師であるメナージュに対するこれほど明確な反論は相当の自信がなければできない。ラファイエット夫人は「普通の話し方」について、メナージュに引けを取らない知識があるという自負心を持つまでになっていたのだ⁹。

ラファイエット夫人がどんな文体に価値を置いていたのかについて、もう少し手紙を探ってみよう。ヴォワチュールというサロンで人気を博した詩人の作品について『『アルシダリス』を読みました。気に入ったというのはもうお伝えしたと思いますが、もし自由に何か感想を述べるとしたら、物語の文体にしてはあまりにも派手であまりにも装飾的に思えますと申し上げます」¹⁰と批評している。ラファイエット夫人が好む文体とは、これ見よがしの技巧や装飾的表現を排した、抑制の効いた端正な文体なのである。夫人の盟友ラ・ロシュフコーはラファイエット夫人の文体について「散文の書き方では、これほど自然でこれほど繊細なものはありません。あなたのお手紙を拝見するたび、戯れ言と真面目なことがうまくちりばめられているのに感心いたします。まるですべてが正しくあるべきところにあるようで、それでも作為が感じられず、書く必要から書かれているといった調子なのです」¹¹と言う評価をしている。また会話の調子について「あなたの会話は、相

⁸ *Œuvres Complètes, op.cit.*, p.914.

⁹ ラファイエット夫人がメナージュの詩作に対する事実上の協力者だったと考えることもできる。Natalie Freidel, «Madame de Lafayette et Ménage: Naissance d'une Muse Moderne», *Presses Universitaires de France/«Dix-septième siècle»*, 2018/3 n280, pp.487-498.

¹⁰ *Œuvres Complètes, op.cit.*, p.917.

¹¹ *Ibid.*, p.16.

手の気分や機知に合わせて、簡潔にもきらびやかにもなり、快活にも深刻にもなります」¹²という観察をしており、社交に欠かせない多彩な会話術を駆使できる能力の持ち主だったことが分かる。むやみに装飾的な文体を多用して相手を閉口させることなく、場面、相手、話題に最もふさわしい言葉を選択できた。アカデミー・フランセーズで近代フランス語の成立に貢献したボワローはラファイエット夫人について「最も才気あふれる、最もよいフランス語を書くフランス女性」¹³と評しており、簡潔で明晰な言語として整備されつつあったフランス語の理想像にかなう文体の持ち主だったと考えてよい。プレジューズと呼ばれるサロンの女性たちが好んで多用した、直接的な表現を避けた回りくどく気取った言葉使いとは一線を画していたのである。「決めたことを貫く意志の強さ」「困難に前向きに耐える強さ」¹⁴などという、ラ・ロシュフコーが描いたラファイエット夫人の人物像を考え合わせると、ラファイエット夫人は、女性的なサロン文化を乗り越え、言語においても行動においても、男性と対等あるいは彼らを牽引する人物になっていたのである。

もう一つ、メナージュ宛の若い頃の手紙で特徴的なのは、自身の体調不良に関する記述が多いことである。たとえば、1654年、20歳の時のメナージュ宛の手紙にはすでに発熱と頭痛についての言及があり、1656年22歳の時のメナージュ宛の手紙では、「二日前から熱と頭痛に悩まされています。(中略)短いお手紙となりましたが、病気のためですのご容赦下さい」¹⁵と書き、その1週間後も「まだずいぶん調子が悪くお手紙書けませんでした」¹⁶と書いている。1657年の手紙では、頻繁におそってくる「頭痛」について、「人は、時には機知を失うものだと思います。たとえば、私の場合、条文や告発、判決や関連書類しか頭がないことになるのです。雑用や訴訟書類のためにしかほとんど書き物をしません。詩のことも、イタリア語のことも、スペイン語のことももう考えません。(中略)私に才気があったとしても、もうなくなって雑事の才だけになるでしょう」として、自分の病的状態は「才気の病」という分析をしている¹⁷。ラファイエット夫人は、繰り返し起こる身体の病的状態について、単純に肉体の問題として捉えるのではなく、「才気」という精神的な状態にかかわる問題だと分析している。ラファイエット夫人にとって病的状態は、内的な自己分析の契機になっていた。これは、彼女の文学的関心が常に人間の心理であったことと一致する。

3 交遊の広がりーサロンにおける存在感の確立

メナージュを通してユエやセグレといった学者たちと知り合い、ラ・ロシュフコーとの交流を深めていく時期の手紙を検討しよう。自身も『格言集』を発表していたサブレ夫人に宛てて1660年頃書かれた手紙には、ラ・ロシュフコーの『格言集』について「このようなものを心に描くには精神と心の中にどんな腐敗をお持ちなのでしょう。こんなおふざけが真面目なことだとしたら、そういう格言はいつだったかあの方があなたのお宅で召し上がったポタージュよりご自分の評判を台な

¹² *Œuvres Complètes, op.cit.*, p.17.

¹³ *Ibid.*, p.XII.

¹⁴ *Ibid.*, pp.16-17.

¹⁵ *Ibid.*, p.881.

¹⁶ *Loc.cit.*

¹⁷ *Ibid.*, p.899.

しにしてしまうのではと思うくらい驚きました」¹⁸という感想を書いている。ラ・ロシュフコーとの関係が親密になるのは1662年頃とされており、これは一読後の印象にとどまると考えられる¹⁹が、サブレ夫人という、当時才女の誉れ高かった女性に対して意見表明のできる立場にあったことに注意したい。ラファイエット夫人の批評に優れた人たちが耳を傾けるようになっていたのである。

1663年のユエへの手紙では、ラファイエット夫人はユエのある作品に対して「とても美しいと思います。あなたはフランス詩人におなりです」と述べ、別の作品に対して「こちらは大変気に入りました。誤りを探してほしいなどどうしてお望みになるのでしょうか。メナージュ様は何も見つからないとのこと」²⁰と書いている。ユエがメナージュだけでなく、ラファイエット夫人の感想を求めたことに対する返事と考えられ、ラファイエット夫人の批評が創作者にとって有意義だと認められていたことが分かる。文学仲間の一員としての地位を確立したことを表わす箇所として、ポーランド語に関する記述がある。「ポーランドからいらしたご婦人にお会いしました。ポーランド語をお話しいただくようお願いしたのですが、話したいことを忘れるほど難しいものでした。ポーランド語について一つだけ分かったことは、他の言語とは違って、単数形と複数形が無関係な形をしており、語尾の形も似ていません。単数の男性を意味する単語と複数の男性を意味する言葉はもう似たところはなく、全く別のものを指しているかのようです。今日私が学んだことはお二方にお教えします。機知に富んだ方々は私たちには何かの役に立ちますから」²¹とユエとセグレの両者に宛てた手紙にある。ユエとセグレと自分を「私たち」とひとくくりにして外国語への関心と収穫を共有しようとしている。彼らはそれぞれが知り得た知識を与えたり受け取ったりしながら、教養と言語感覚を洗練させていったのだ。ユエがラテン語で書いた詩について「大変優美で大変気に入りました」と短い批評を述べたあと「セグレ様は私が詩についてのよい判定者なので、執筆中のヴェルギリウスを送るから私の意見を聞かせてほしいとのこと」²²とも書いている。ラファイエット夫人は文士たちの間で優れた鑑賞眼を持つ有能な批評家として尊重されており、本人もそのことを自覚している。

ラファイエット夫人は批評にとどまらず、周囲の詩人や学者たちの協力の中で自らも作品を執筆していく。1662年の初夏にメナージュ宛てに書かれた手紙では、『モンパンシェ公爵夫人』が校正段階にあり、「まもなく世に出るけれど幸い私の名前は出ないそうです。(中略)もし誰かに聞かれましたら私が書いたとは仰らないで下さい」²³と依頼しているが、同年8月の手紙ではこの作品を「私たちの『夫人』」²⁴と呼んでおり、この作品がメナージュの協力を得て描かれたことを示唆しているが、それだけだろうか。ユエ宛ての1669年の手紙で完成間近であることが分かる『ザイード』は1670年にラファイエット夫人ではなくセグレの名で出版された。序文を書いたユエは後に、ラファイエット夫人は執筆中に何度もユエに助言を求め、「私たちは力を合わせて私たちの子供たちを

¹⁸ *Œuvres Complètes, op.cit.*, p.921.

¹⁹ *Ibid.*, p.1470.

²⁰ *Ibid.*, p.938.

²¹ *Ibid.*, pp.943-944.

²² *Ibid.*, p.952.

²³ *Ibid.*, p.930.

²⁴ *Ibid.*, p.932.

結婚させましたわね」とよく言っていたと告白している²⁵。この作品に対してもラファイエット夫人が「私たち」といういい方をしていることは重要だ。「私たち」という言葉には、新しい形の文学を創造しようとする知的共同体の一員である、という意識が込められていると考えられる。実名で発表されればサロンの女性による作品という先入観で評価される。そうではなく、全く新しい視点で読んでほしいという意思表示として、匿名での出版を望み、名を伏せたのではないか。

手紙から推察できるラファイエット夫人の文学的円熟について、周囲の文士たちはどう見ていたのだろうか。セグレの『回想録』²⁶で探してみたい。これは、スキヤロン、メナージュ、ヴォワチュール、ラ・ロシュフコーなど当時の文士たちや、ランブイエ嬢などサロンの中心人物たちについての手記である。ラファイエット夫人について書かれた部分も多く、たとえば『クレヴの奥方』はラファイエット夫人のものである。(中略)『ザード』は私の名で出版されたが、これも彼女が書いたものだ。私が一部関わったことは本当だが、小説の構想に関してのみであり、ここでは芸術の諸規則がきわめて正確に守られている²⁷と断言している。「ラファイエット夫人は私に機知を与え、私は彼女の心を作り替えた、とラ・ロシュフコーは言っていた」²⁸と紹介しており、セグレが「最も洗練された人物」²⁹と評価していたラ・ロシュフコーにとってラファイエット夫人は知的な恩恵を相互に享受し合う存在だったのである。ラファイエット夫人の愛読書であった『クレリー』の作者スキュデリー嬢と比較して「ラファイエット夫人は賢明さで勝っていた。自分が受けた賞賛の中で私が言った二つのことほど気に入ったものはありませんとラファイエット夫人は言っていた。才気あふれる上に賢明であり、万事ごまかさず真実を愛する人だと言ったのだった。これこそ、ラ・ロシュフコーに真実の人と呼ばせたものなのである」³⁰と書いている。ラファイエット夫人は常に真実を見抜き、それを適切な言葉で表現できる書き手だと認められていた。

ラファイエット夫人が次第に、周囲を凌駕する一流の文化人になっていった点について、セグレは次のように証言する。まず、ラファイエット夫人の知性の高さについて「ラファイエット夫人はラテン語の勉強を始めて3ヶ月後には、教師であるメナージュ氏やラパン神父よりできるようになってしまった。(中略)実際に彼女は、詩句の正しい解釈を語り、二人とも彼女が正しいという意見で一致した」³¹という逸話を紹介している。「メナージュのような、優れたギリシャ語の詩と優れたラテン語の詩を書く詩人をどこで探せばよいのだろうか。彼は偉大な人物だった。それでも、詩の繊細さということになると分からなかった。だが、ラファイエット夫人はその繊細さをよく理解していた」³²とも書いている。セグレはラファイエット夫人がメナージュの生徒でありながら、鑑賞力や繊細な表現といった文学的な才能については遙かに高く評価する。ラファイエット夫人がメナージュとの関係で、教えられる立場から助言を与える立場へと変貌していった様を裏付けるもので

²⁵ *Œuvres Complètes, op.cit.*, pp.310-311.

²⁶ Jean Renauld de Segrais, *Œuvres: Nouvelle Édition Revue et Corrigée I-II*, Slatkine Reprints, Genève, 1968.

²⁷ *Ibid.*, p.7.

²⁸ *Ibid.*, p.21.

²⁹ *Ibid.*, p.22.

³⁰ *Ibid.*, p.34.

³¹ *Ibid.*, p.28.

³² *Ibid.*, p.32.

ある。また、セグレは「ラファイエット夫人はラテン語もできたがそんなそぶりは見せなかった。彼女によれば、他の女性たちからの嫉妬を避けるためということだった」³³とも書いており、ラファイエット夫人の冷めた観察眼と判断力を知ることができる。ラテン語を勉強していることは、メナージュやユエに宛てた手紙にも何度も書かれている。ラ・ロシュフコーも、ラファイエット夫人はイタリア語に堪能な上、「世界で最も美しく最も難しい言葉の基本を習得している」³⁴と書いており、おそらくラテン語ができることを知っていた。このように文芸仲間である男性の間では周知の事実であるラテン語についてサロンの女友達に隠していたのは、「嫉妬」を避けるという冷静で的確な判断によるものだった。ラファイエット夫人は、サロンでの噂話の餌食となり周囲に煩わされるより、真実の学問の追究に価値を置く。知識の自慢という次元を超え、才能の真の深化を男性と対等に目指すことを選ぶのである。自分の人生は自分の意志で築こうとする姿は、匿名での作品発表へのこだわりにも見られたものである。

4 セヴィニエ夫人宛の手紙一本音の吐露

1672年から1673年にかけてのセヴィニエ夫人への手紙からは、『クレーヴの奥方』執筆に至るラファイエット夫人の内的変化が吐露されているように思われる。記録係として仕えていたアングリット・ダングルテールの1670年の死去により宮廷とのつながりが弱まっていた1673年の手紙では、「今サン・モールに来ています。おつきあいやお友達とはお別れです。子供たちと気持ちのよい天気だけです。それで十分です。フォルジュの水を飲んでます。健康のことだけ考えています。どなたにもお目にかかっていません。どなたのことも全く気にならないのです。どなたも皆ご自分の楽しみや、完全に他の人次第の楽しみだけ考えていらっしゃるように思えます。こんな心境になれる私には天賦の才能があるのでしょうか」³⁵と書いている。エミール・マーニュはこの部分を取り上げて、「慎重で強い、隠された母性的な感情」が吐露されていると指摘している³⁶が、それ以外に、2つの特徴を挙げたい。まず、文体である。手紙全体の儀礼的表現の多い冗長な文体³⁷の中で、きわめて簡潔で率直な文章である。こういった文体は、自分の主張を虚飾なく表現したいという、彼女の根本的な方向性の現れであると同時に、セグレやラ・ロシュフコーらと共有する古典主義的明晰さの方向性も見え隠れする。もう一つの特徴は、社交の楽しみへの埋没から解放された孤独は「それで十分」に幸福を与えるものだとして肯定的に捉えていることだ。「他の人」に左右されずに主体的に生きる幸福な孤独についての意識が深まっていると考えられる。宮廷の公務や家庭の諸問題の解決に奔走する実務家の一面もあったラファイエット夫人だからこそ、孤独が深い休息と結びつく。以上指摘した簡潔な文体と孤独の肯定という特徴は、『クレーヴの奥方』にまっすぐつながっていく。

宮廷への復帰や『クレーヴの奥方』出版などをはさみ、16年の空白を経て収録されているセヴィ

³³ Segrais, *op.cit.*, p.76.

³⁴ *Œuvres Complètes, op.cit.*, p.16.

³⁵ *Ibid.*, p.983.

³⁶ Émile Magne, *Le Cœur et L'Ésprit de Madame de Lafayette*, Édition Émile-Paul Frères, Paris, p.226.

³⁷ *Ibid.*, p.197.マーニュは『クレーヴの奥方』がラファイエット夫人だけでなく、ラ・ロシュフコーとセグレとの共同作品であるとする根拠として、「ラファイエット夫人の手紙は、接続詞が多用され、文法の誤りが多く、繰り返しの多い、重い文体であること」を挙げている。

ニエ夫人への次の手紙は1689年のものである。ブルターニュで冬を過ごそうとしていたセヴィニエ夫人に資金の工面を申し出てパリに来ることを勧める内容だが、「簡潔に述べます」³⁸から切り出し、単文の連続による断定的な文体で貫かれている。無二の親友を助けるために持ち前の実務力を発揮して得た結果を正確に伝えるために、一切余分な言葉を排した簡潔な言葉で表現する。明晰な言語はラファイエット夫人の真骨頂である。この頃から1693年に亡くなるまでのラファイエット夫人は、発熱や頭痛、抑鬱などの体調不良に悩まされていた。この時期には「急に体の節々が痛くなり、助けてもらわなくては立ち上がれず、すっかり痩せてしまいました。こんな状態で長く生きられるとは思いません」³⁹といった、きわめて直截な表現で老いと死を嘆く部分が増えていく。セヴィニエ夫人との深い信頼関係において、自分の弱さや不安をさらけ出し、死を前にして宗教への接近を語った。死の前年の1692年にセヴィニエ夫人に宛てた最後の手紙は、肉体と精神の衰えを切々と訴えたあとで、「親愛なるあなた、あなたこそ私がこの世で最も心から愛した人です」⁴⁰と結ばれている。言葉によって周囲を魅了し自己を確立してきたラファイエット夫人は、最後に真実の友情を書ききったのである。

おわりに

ラファイエット夫人は、若い頃から読書を愛しラテン語や韻文を学ぶ一方、結婚後は夫の訴訟問題を助け、息子たちの教育に尽力しながら、社会的には宮廷と深く関わり、記録者として活躍した。家庭と仕事を見事に両立させたたたかな生活者であり続けた女性だと言えるだろう。手紙の検討を通して、病気がちであったにもかかわらず文芸サロンでの社交も続け、典型的なサロンの女性像に収まらない生き方を模索し、一流の文士たちと対等な関係を築いていったことが明らかになった。彼らとの切磋琢磨で知性や会話術、言語力を磨き、彼らの協力を得ながら小説を執筆するという、誰も歩いたことのない新しい道を開拓したのである。匿名性にこだわったのも、女性作家としての限定的な評価を避け、古典主義作家の堂々たる一人であり続けたいという意思の表れとも考えられる。

ラファイエット夫人は、心理の繊細な動きに訴え、時に率直すぎる表現も辞さずに必要なことをありのまま伝えようとする手紙を書いた。冷静に観察し分析した現実を、自然な表現で描くことを高く評価した。ラファイエット夫人は、簡潔と明晰を是とする古典主義のうねりの中で成長し、引き寄せ、その完成に大きな貢献をしたのである。

手紙に現れる確固たる個の意識は作品に投影されていく。個として主体的に生きる意志を貫いたラファイエット夫人が造形した女性主人公たちもまた、強い意志の持ち主が多い。クレーヴの奥方の母シャルトル夫人は、最期まで教育方針を貫く意志を失わなかった。クレーヴの奥方もまた、他の誰とも違う人生を生きる意志に突き動かされた女性であった。宮廷文化の制約の中で自己決定を貫いたラファイエット夫人にしか表出し得なかった人物像である。

³⁸ *Œuvres Complètes, op.cit.*, p.1048.

³⁹ *Ibid.*, p.1507.

⁴⁰ *Ibid.*, p.1082.